

森 が あ り

Imagin 21

「イマジン21」第15号／平成19年6月1日発行（年2回 春秋発行）

樹 が 育 ち

そ し て

リレー連載

世界遺産
奈良歴史散歩 ⑥

Essay 印刷文化逍遙 15

とらぎょう
探案 秋葉原

報 告 DTPエキスパート
奈良ソムリエ検定

特 集 大和の酒蔵めぐり ③

奈良の
伝統工芸 高山茶筌

付録

紙質と印刷の違い

ゴールデンウィークに、東京から孫達が帰ってきたので、今回は車2台で黒滝村と天川村へ日帰り旅行を実施しました。黒滝村の「きららの森」ではバーベキューを楽しみ（食材等は当然のことながら持参しなければいけません）、屋根のあるところで炉と炭が用意してもらえて大変便利です。天川村の温泉に入ったあと、「ごろごろ水」を取水したりして、私も子供心に帰り日帰り旅行でも内容の濃い一日でした。自然に親しめる機会が少ない都会の子供にとって、スイスイ走れる奈良の道路にも感激していました。

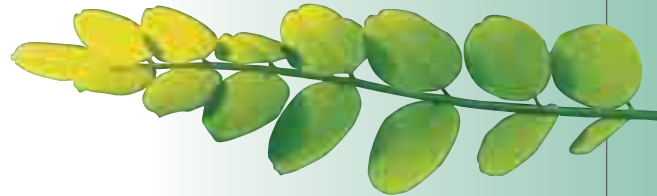
最近、奈良の中部南部が脚光を浴びていますが、イマジンを発行して、奈良にはいくらでも紹介するところあることを改めて気づき、これからも更に奈良のすばらしさを深耕いたしたいと思っております。

代表取締役社長 近東 宏光

Imagin21

わたしたちができる環境づくり

自然との共存を図りながら
限りある資源を大切に使い環境を守っていく
私たちは時代に役立つ企業であり続けたいと考えます



編集/制作/発行
共同精版印刷株式会社

本社：〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6
TEL 0742-33-1221 FAX 0742-33-7035
大阪支社：〒542-0082 大阪市中央区島之内1丁目12-3
TEL 06-6271-7951 FAX 06-6271-7954
東京支社：〒116-0014 東京都荒川区東日暮里5丁目6-4
TEL 03-3802-4741 FAX 03-3802-4740

本誌に対するご感想、ご要望などがございましたら、上記本社内「イマジン21」編集部までお寄せください。



世界遺産

奈良
歴史散歩

リレー連載

6

奈良の祇園祭



八坂神社拝殿

奈良の祇園祭

奈良にも祇園祭があった

祇園祭といえは、京都。現在では、そう思いこんでいる人が多いと思うが、しかし、今から五〇〇年ほど前の一五世紀から一六世紀ころは、そうではなかった。

一五世紀から一六世紀、つまり室町時代から戦国時代にかけての奈良でも、京都におとらず盛大に祇園祭がおこなわれていたからである。

とはいっても、よほど歴史に通じていなければ、奈良に住む人でも、ほとんどがこの事実を知らないのではないだろうか。

それでは、その祇園祭はどこでおこなわれていたのかといえは、東大寺大仏殿の西、現在の奈良市押上町一帯でおこなわれていた。

それほど大きな神社ではないので、観光客でなくても通りすぎてしまいうるが、この押上町には、今でも八坂神社（古くは、祇園社といった）が鎮座している。

この八坂神社の祭礼が、つまり奈良の祇園祭（古くは、祇園会といった）であった。

東大寺祇園会

現在の奈良町一帯が、かつては興福寺の支配下にあったのに対して、この八坂神社のある押上町一帯は、東大寺の支配下にあった。

室町・戦国時代、東大寺の支配下にあった地域のことを、東大寺郷とよんでいるが、奈良の祇園祭は、史料のうえでは、「南

都祇園会」とか「東大寺祇園会」「手害祇園会」と出てくる。

奈良の祇園祭とはいっても、厳密にいえば、それは、この東大寺郷の祭礼だったことが、ここからもうかがえよう。

ところで、押上町に八坂神社が勧請（神の分身を移しまつること）されたのは、南北朝時代の建武五年（二三三八）のこと。

そのことを伝える史料（『東大寺雑集録』）によれば、「祇園社、転害、北の塚に影向」と記されており、当初、八坂神社

は、押上町の北の手貝町にあったことがわかる。

それが、どのようにして現在地に移ったのかについてはさだかではないが、奈良の祇園祭は、この手搔郷（現在の手貝町）、押上郷（現在の押上町）、今小路郷（現在の今小路町）、中御門郷（現在の中御門町）の四つの郷を中心におこなわれた。

造り山

神社自体が勧請されたのは、建武五年のことだが、祭礼がおこなわれるようになったのが確認されるのは、それから約三〇年後の応永一〇年（一四〇三）のこと。

そして、これ以後は、さまざまな史料にその存在が記されるようになるため、そのようすもかなりわかるようになる。

まず、祭礼がおこなわれる日、つまり式日は、旧暦の六月十四日。これは、京都の祇園祭と同じで、現在の暦でいえば、七月二四日ころにあたる。

また、京都の祇園祭で有名なものといえば、山と鉦の巡行だが、奈良の祇園祭でも同じようなものが出された。

もつとも、京都の場合、現在でも巡行する山や鉦の数が三二



八坂神社



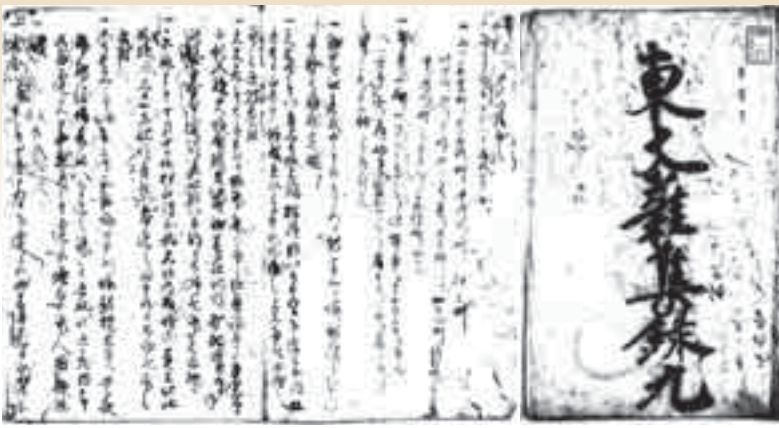
拝殿

基もあるのに対して、奈良の場合、一〇基にも満たなかったようである。

京都と奈良という違いもさることながら、奈良の場合、さきにもふれたように、東大寺郷の四つの郷を中心とした祭礼だっただけに、おのずと規模もかざられたものになったのだろう。

それでは、奈良の場合、どのようにして山が出されていたのであろうか。

史料（『東大寺雑集録』）によれば、山は、手搔郷・押上郷・今小路郷・中御門郷の四つの郷



写真／東大寺図書館

によって出されていたことがわかる。

ただし、京都の場合とは異なり、「この四郷にめぐりてつくる」、つまり、各郷が毎年、山を出していたわけではなく、一年ごと交代に出していたようである。

ここでいう山とは、造り山ともよばれるもので、趣向をこらして、人形や物をならべた見せもののこと。

同じような祇園祭のなかでも、現在もつづいている九州博多の祇園山笠などをイメージするといいだろう。

この造り山というのは、毎年、異なった趣向で造りかえねばならないので、かなりの費用がかかる。

奈良の祇園祭が、一年ごと交代に山を出すようにしていたのも、おそらくは、そのような費用の問題があったからだろう。

それを裏づけるように、四つの郷を助けるために枝郷というのもあった。

舞車

いずれにしても、造り山は、毎年、一基しか出されていなかったわけが、これとは別に、四つの郷は、そろって毎年、舞車というのを出していた。

この舞車、その名の通り、車のうえで、舞をおこなうという出しものだが、そこで舞うのは、「八つ撥打つ子」と史料（『東大寺雑集録』）に記されているので、小さな鼓である鞆鼓（別名が八つ撥）をたずさえた子どもだった。

京都の祇園祭では、今でも長刀鉦のうえで、稚児とよばれる子どもが鞆鼓を打ちつつ舞っているが、おそらくはそれと同じようなものだったのだろう。

奈良の祇園祭では、この「八つ撥打つ子」が、笠鉦といっしょに、「肩の上にて舞の手をする」とも史料に記されているので、大人の肩のうえでも舞うしぐさをしていったようだ。

舞車の順番争い

このように、奈良の祇園祭では、造り山・舞車・笠鉦といった出しものが出されていたことがわかるが、このうち、メインとなるのが、四つの郷がそろって出す舞車だった。

そのこともあって、この舞車がどの順番で巡行するかをめぐる争いは、しばしば争いがおこった。

京都の祇園祭でも、同じような争いがおこっており、それを解決するため、クジ（籤）を引いてその順番をきめていたこと

が知られている。

奈良でも同じように、舞車の順番を「探り」（クジのこと）によってきめていたようだが、それでも納得しない郷が出てきたため、文明二年（二四七九）から明応七年（一四九八）のおよそ二〇年にわたり舞車が出されないこともあった。

しかも、その争いが、東大寺ではなく、興福寺のもとへ持ちこまれたこともあって、さらに混乱をきたしたようである。

そのようなことも影響したのであろう、戦国時代の大永三年（一五二一）以降には、造り山も出されなくなった。

そして、永禄一〇年（一五六七）、大仏殿が松永久秀らに焼かれた際に八坂神社も類焼、それを境に祇園祭も盛大にはおこなわれなくなったとされている。

河内 将芳

【かわうち まさよし】

1963年、大阪市に生まれる。京都大学大学院博士課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。

現在、奈良大学文学部史学科准教授。京都をはじめとした中世都市の社会史を勉強している。

著書に『中世京都の民衆と社会』（思文閣出版、2000年）、『中世京都の都市と宗教』（思文閣出版、2006年）などがある。



中里介山『大菩薩峠』を自費出版する

これまで作家や文学者と印刷文化との関係についてのべてきたが、正直なところ一般にはあまり知られていないといった方がよいかも知れない。

今回は明治・大正・昭和にわたって活躍した小説家、中里介山（明治一八―昭和一九年、一八八五―一九四四年）について書いてみたい。

まず、大体の経歴について、『日本文学史辞典』（一九八二・九、京都書房）によって記すと、つぎのとおりである。

本名、弥之助。東京西多摩郡羽村の農家の次男。尋常小學校卒。独学で勉強し代用教員を経て都新聞社に入社、社会主義やトルストイの影響を受け、『高野の義人』『島原城』を同紙に連載した。大正二年より『大菩薩峠』を書き

続けたが、大衆小説の呼称を好まず、敬天愛人克己の理想に生きた反骨孤高の「思想小説」家であった。

これを見て偶然思ったことがあるが、これまで紹介してきたウォルト・ホイットマンにしろ、ベンジャミン・フランクリンにしろ、あるいは吉川英治や松本清張も然りであるが、彼らはすべて高学歴者ではなかったが、苦学をして偉い人になったという共通の人生行路であったということだ。

さて、こんにちは中里介山といっても、若い人はもちろんのこと、年輩者でも一部の人しか知っていないだろう。

それには、以前とくらべて読書人口が大幅に減っていることも関係する。まして戦前の大衆小説ともなれば、よけいに知ら

ない人がいて当り前ということになる。

なお、同時代の人としては野村胡堂がいるが、誰かというところ『銭形平次捕物控』の原作者といえはわかるだろう。

ところで、さきほどの『大菩薩峠』だが、長さの点でいうと、世界一ということになっている。

しかも、完結されていず未完に終わっているから、なおさらびつくりするのである。

それで、始めのほうで紹介したように、介山は都新聞に勤めていて、その新聞にじぶんの小説を連載していたのであった。

そして、昔の記者は、全部ではないが、じぶんで活字を拾ったり、版を組むことができた人もいた。当然ながら介山は両方ができ、のちに独立して印刷所を開いたとき、大変そのことが役立ったのである。

ちなみに、そんな介山の姿を、大村彦次郎の『時代小説盛衰史』（二〇〇五・一一・筑摩書房）から引いてみよう。

介山の活字熱が高まったのもこの時期からだ。まず中古の手刷り印刷機を購入し、自宅の土間に据えつけた。新聞社から帰宅すると、すぐにたすき掛けで、活字を組み、

インキを練った。最初はこの印刷機で、自分の近況や感想を手紙代りに友人たちへ送っていたが、そのうち私家版の「大菩薩峠」の刊行を思い立った。まだその当時、一流の版元からの出版申し込みは皆無だった。

この部分は、印刷文化の上からいっても極めて貴重な記述であり、いわゆる家内工業的かつ小規模的な印刷が行われていたことの証言であろう。

それにしても、新聞社の勤めが終わるとすぐに帰宅し、休む間もなく「大菩薩峠」の印刷にかかったという思い入れは、尋常なものではなかったことがわかる。

記述はまだ続いていて、その詳細にわたる内容には、ただただ感心するばかりである。少々長いですが、もう少し引くことにする。

介山は文選から植字、校正まで、他人の手を借りずに一人でやってのけた。二頁組み上がる毎に和紙に刷り、刷り終るとすぐに解版した。汚れた活字は石油で洗って、もとの活字ケースへ収めた。さすが口絵と製本だけは自分です

ることは出来ず、専門家にまかせた。素人の手作りにしても、常軌を逸する打ち込みぶりだった。大正七年二月、介山の手製になる「大菩薩峠——甲源一刀流の巻」三百部が陽の目を見た。ただし、刷り損じが出て、実際に市中に出回ったのは二百五十部、本文二百二十八頁の和綴じの小型本であった。紫色の表紙には題名が金文字で打ち出され、小川芋銭、井川洗屋の二人が三色の口絵を描いた。このあと介山手刷りの「大菩薩峠」は「鈴鹿山の巻」が出たが、さすが素人の印刷は手に余ったのか、第三篇の「壬生と島原の巻」以降は都新聞に属する印刷職人の手にまかせた。ここで和紙から洋紙、和綴じから洋式造本に替わった。初めて本文にルビも付いた。定価はいずれも一円だった。

介山の自作に対する深い思い入れについては、すでにふれたところだが、じぶんの作品をみずから印刷する人は非常に少ない。また、活字の本数が限られていたから、印刷が終るとすぐに活字ケースに収めた話は、前回ペンジャミン・フランクリンのところでふれたので、そち

らを参考にしてほしい。

こうして写してみると、あらためて介山の印刷に対する知識や情熱には、頭が下がるばかりだが、そこには、ホイットマンやフランクリンらと共通の、印刷物への崇敬の念があったことを思わざるをえない。

つまり、じぶんの書いたことが活字になる、あるいは考えていたことが活字として表現され、人々に読まれていくことへの願望が、書物という形になって目的が達成される。

それは何ものにも代えることのできない宝物であっただろう。時代は違いが、かつて作家の伊藤整が、処女詩集『雪明りの路』の誕生について『若い詩人の肖像』で語られていたが、その思いは全く同じものであっただろう。

介山がこの私家版をいかに大切にしていたか、また、他人には容易に貸与しなかったという経緯も、つぎの一文を読めば明らかである。

介山はこの私家版によほど愛着を持っていたのか、自分の気に入らぬ相手には断じて渡さなかった。あるとき新聞社の同僚の平山蘆江が自宅を訪ねて来て、介山が不在だっ

たので、居合わせた母親のハナから「大菩薩峠」の私家版を借用して帰った。帰宅した介山は母からこのことを聞くと、ひどく機嫌を損じ、深夜、使いの者をわざわざ大久保余丁町の蘆江の家まで行かせ、返却を求めた。だが、蘆江も意地になって、返さなかった。蘆江の戯作者趣味が介山にはもともと肌が合わなかった。数年前から同じ社内においても、ほとんど口をきかなかったが、この一件があつて以来、その対立は決定的なものになった。

人間には相性というものがあつて、どうしても合わない人と、その反対に会った瞬間から気に入る人とに分かれるから、じつに不思議なものである。

この辺で著者の大村彦次郎について紹介しておこう。氏は一九三三年東京生まれの人で、講談社で「群像」の編集長を経て、

文芸出版部長、文芸局長、取締役などをつとめた。

著書は『文壇うたかた物語』『文壇栄華物語』『文壇挽歌物語』『ある文藝編集者の一生』など、編集者からみた作家や文壇のエピソードなどを豊富な経験からたくみに捉えられ、独自の作家論や文壇史を描いたということが出来る。

通常、編集者はあくまでも影の人であり、あまり表面に出ることは少ないが、作家や文壇の裏社会には通じていて、読者の知らないことを教えてくれる点では、ユニークな存在だといえる。



嘉瀬井 整夫

【かせい ただお】

1934年京都市に生まれる。
1949年より同94年まで印刷産業に従事。
奈良県立短期大学（現奈良県立大学）卒業。

主著『井伏鱒二私論』
『井伏鱒二とその時代』
『奈良大和路文学散歩』ほか。
文芸評論家。

秋葉原

江 戸時代から火事が多い地域で今の静岡県から鎮火の神様である秋葉大権現を勧請して神社として祭った。この頃から秋葉原（あきばっばら）などと呼ばれるようになる。その後、神社は移転をしたが秋葉原の地名は残った。現在の“アキバ”の語源はこのあたりからと言われている。

*勧請（かんじょう）…神仏の分身を他の地に移して祭ること。

秋葉原といえば



秋葉原駅前

電気街

10数年前までは秋葉原と言えばこのイメージでした。当然今でも大小織り交ぜたたくさんの家電・パソコン関連・電気部品関連のお店があります。

オタク

今ではこちらのイメージが強いでしょうか。サブカルチャーの発信拠点です。アイドル・フィギュア・アニメーションなどカテゴリーは豊富で且つ細分化しているようです。もともとはネガティブなイメージの蔑称でしたが現在では「ある特定の趣味分野に生活の時間や所得の多くをかける人たち」という捉え方をするようです。



再開発後の複合ビル

再開発

秋葉原駅に隣接していたアキハバラデパートが昨年末に閉店。昭和26年開業以来55年間秋葉原の「顔」の一つでした。一方、再開発で大きな複合型ビルが誕生しています。

メイド喫茶

他所にも今はたくさんあるようですが、発祥は秋葉原。「お帰りなさいませ。ご主人様」という声で迎えてくれるそうです。

おでん缶

おでんを缶詰にして自動販売機で売っています。こちらも秋葉原を代表する一品だとか。味も結構いけるとの評判です。



電気街



つくばエクスプレス秋葉原駅改札

つくばエクスプレス

一昨年開業の首都圏新都市鉄道です。秋葉原～つくば間を最短45分でつなぐそうです。



DTPエキスパートとは

1994年にスタートし、日本印刷技術協会（JAGAT）が主催するDTPエキスパート認証試験制度で、今現在では26期までに延べ3万8、500人以上が受験し、1万6、079人が合格しており印刷関連では広く認識されています。

また、DTPエキスパートのカリキュラムを社内教育制度の一貫に位置付ける印刷関連企業が増えています。

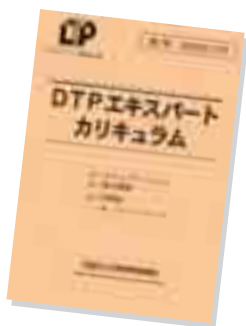
●DTPエキスパートの役割

従来の伝統的な印刷、製版からDTPの出現によって印刷関連業以外の方が多く印刷物製造の分野に直接かかわるようになってきています。

専門分野の方と、それ以外の方には文化的風土のギャップがあり、これらのギャップを埋めなければ良い印刷物ができません。又、同様にこれらの文化的風土のギャップを埋め、よりよい印刷物の実現に向けて制作環境やコミュニケーション造りを行うのが、DTPエキスパートの大切な役割でもあります。

●DTPエキスパート認証試験

プランナー、デザイナー、エディター、印刷営業等々、立場は異なっても良い印刷物を造るという共通の目的があります。それぞれの立場のギャップを埋め知識を正しく理解し、お互いに良いパートナー（テクニカル



スーパーアドバイザー）になる事を目的に、DTPエキスパート認証・登録制度があります。

・次にあげる6種類のカテゴリに分かれています。

〔全てのカテゴリで80%以上正解が合格ラインです。〕

〔①DTP関連知識、②印刷発注側知識、③印刷工程知識、④色の知識、⑤コンピュータ関連知識、⑥課題〕

○課題は、支給されたデータを使用し作品を作りレイアウト、組版、画像、設計、要素、指定等が評価されます。

●DTPエキスパート登録制度

・DTPエキスパート認証登録期間は技術変化を考慮して2年間です。

〔2年毎に更新試験があります〕

・合格者には認証のIDカードが発行されます。



尚、新しいDTP関連資格にクロスメディアエキスパートが2006年からスタートしています。

ソムリエ検定

去る1月14日、奈良商工会議所主催で第1回『奈良まほろばソムリエ検定「奈良通2級」』の試験が県内4会場で開催されました。総受験者は三、五四人、我こそは奈良通と自信満々に受験された方も多かったですですが、結果は如何に。

奈良まほろばソムリエ検定とは奈良ファンや奈良に精通している方々を認定するための検定です。価値ある観光資源を持つ奈良をより多くの人に理解していただく一方、奈良を訪れる観光客に、そのすばらしさを伝えることができる人材の育成を目指すというたわけています。今年度の2級についてはテキストから90%が出題されるとありますが、結果と傾向は下記の通りです。



写真提供/奈良市観光協会

第1回奈良まほろばソムリエ検定「奈良通2級」

出題例それぞれから抜粋しました。皆さん分かりますでしょうか。

- ①奈良県の地理、動植物についての問題11問。
- ②奈良県の歴史に関する問題13問。
- ③奈良県の遺跡や古墳に関する問題16問。
- ④奈良県の寺社に関する問題19問。
- ⑤奈良県の建築、彫刻、絵画に関する問題9問。
- ⑥奈良県に関連する文学の問題8問。
- ⑦奈良県の伝統工芸、特産品に関する問題8問。
- ⑧奈良県の祭り・行事に関する問題8問。
- ⑨奈良県の世界遺産や観光・文化に関する問題8問。

- ①奈良県南部は高峻な山岳地帯となっているが、奈良県最高峰はどれか。
ア. 日出ヶ岳 イ. 山上ヶ岳 ウ. 八経ヶ岳 工. 高見山
- ②元正天皇と聖武天皇の血縁関係はどれか。
ア. 姉と弟 イ. 祖母と孫 ウ. 母と子 工. 伯母と甥
- ③明日香村にある中尾山古墳の平面の形は何角形か。
ア. 五角形 イ. 六角形 ウ. 七角形 工. 八角形
- ④唐招提寺の建てられた地は、元ある人物の邸宅であったが、それは誰か。
ア. 橘諸兄 イ. 光明皇后 ウ. 藤原不比等 工. 新田部親王
- ⑤東大寺戒壇院の四天王像は、持国天、広目天、多聞天ともう一体はどれか。
ア. 増長天 イ. 帝釈天 ウ. 梵天 工. 吉祥天
- ⑥『南京新唱』、『鹿鳴集』などに奈良の歌を数多く残した歌人は誰か。
ア. 折口信夫 イ. 会津八一 ウ. 堀辰雄 工. 吉野秀雄
- ⑦江戸時代に「南都随一」の物産といわれ、奈良の名産として有名だったのはどれか。
ア. 草木染 イ. ろうけつ染 ウ. 縮 工. 晒

全体の概要

受験者	合格者	合格率(%)	最高点	平均点
3,554	1,397	39.4	100	62.9

年齢別

年代	受験者	合格者	合格率(%)
20歳未満	28	4	14.3
20歳代	451	71	15.7
30歳代	827	199	24.1
40歳代	681	221	32.5
50歳代	798	404	50.6
60歳代	614	398	64.8
70歳代	139	94	67.6
80歳代	6	6	100.0
総計	3,544	1,397	39.4

- ⑧薬師寺でも3月30日から4月5日に修二会が行われるが、その通称はどれか。
ア. おたいまつ イ. ほうらんや
ウ. だだおし 工. 花会式
- ⑨法隆寺が世界遺産に登録されたのはいつか。
ア. 昭和60年(1985)
イ. 平成元年(1989)
ウ. 平成5年(1993)
工. 平成8年(1996)



薬師寺

得点分布

得点	人員	得点	人員
100点	1	50点代	593
90点代	169	40点代	541
80点代	542	30点代	320
70点代	685	20点代	50
60点代	641	10点代	2

総計 3,544

本試験の問題は全部で100問あり70点で合格。各部門の正解は次のようになります。答は①から順に【ウ、エ、エ、エ、ア、イ、エ、エ、ウ】これなら出来そうだという方は是非チャレンジを。

試験結果について、奈良商工会議所様より広報されている表を掲げさせていただきます。難問が多かったのか合格率は約40%と低く、年齢別合格者を見て驚くことは、高齢者から順に合格率がよいということです。一夜漬けやその場しのぎの勉強ではなく、正に、奈良を長く知る機会を多く持たねばということを知りしめた、奈良通になるには時間もかかりますよということでしょうか。これから毎年開催されますが、奈良県民として、奈良を良く知ること、これから来県される観光客の方々にも奈良のすばらしさを語れる県人を目指しましょう。

大和の酒蔵めぐり

手間隙掛けた小仕込みと

杜氏の情熱が自慢

千数百年の永きにわたり、絶えることなく続けられてきた大和の酒造り。杜氏と蔵元集団は、伝統と匠の技を守り時代とともにその歴史を継承してきました。

第三回となる蔵元めぐり。今回は、お酒の神様「大神神社」のお膝元 桜井市三輪の今西酒造様を訪ねました。

桜井市三輪にある造り酒屋、今西酒造様。創業寛保二年、三百有余年の歴史の重みを感じるお酒はあくまで手作りにこだわりの続ける。手間隙を惜しまず、桶一本ずつ大切に仕込まれたお酒は地元は言うに及ばず全国各地に愛飲者が多い。

景観にとけこみ昔ながらの清楚なたたずまいの中、軒先には、大神神社からたまわった造り酒屋のシンボル「志るしの杉玉」がある。店内は、自醸酒のお酒が季節ごとに彩りをそえ、三輪を訪れた観光客の目を楽しませている。店ののれんの奥に酒蔵が有る。今西酒造様の杜氏中村祐司氏は、「桶一本、一本に思い込めて、三輪の伏流水と酒造好適米「つゆはかせ露葉風」、やまだにしこ山田錦」を用い昔ながらの手法で伝統と技を守り酒造りをしています。」と語られている。

一般に、三輪の地は酒造りに適し、大量生産ではない一樽一

樽の醸造が醸す、えもいえない味が自慢。今西酒造様の、大吟醸三諸杉もその代表酒。きめ細かい味わい。喉越しへつたわるすつきり、さっぱりした、くときれ。小仕込みならではの味わいある酒である。

同酒は、全国新酒鑑評会で、六度の金賞を受賞。同社の大きな勲章のひとつである伝統と技と酒造りに適した環境が融合した結果である。



丹精な酒造りへの こだわり

今西酒造様の酒造りは、手作りが基本。酒造りは蔵人たちの心と技が一体になって、はじめてよいお酒ができる。すべて量産ではない本物にこだわる。

蔵元では、目にすることの少なくなったしぼり機（木槽）があり古い酒造りにはなくてはならないもので、このしぼり機から良質の酒粕もでき、地元の方に口コミで人気が広がっている。



丹精な酒造りに勤しむ杜氏
中村祐司さん



発酵の終わった麹を圧縮してお酒と酒粕にわけける。

「人とひとのつながりを大切に お酒と食文化のコラボレーション」

— 販売展開のあらたな挑戦 —

時の経過とともに酒類も多様化し、飲み手の嗜好も広がりを見せる中、お酒と食文化の融合。そんな思いで同社の今西社長が立ち上げたのが奈良市小西通りにあるダイニングバー 雷来。

お酒と食は一体のもの、食にあうお酒・お酒にあう食、それをコラボレーションし、多くの方に地酒の良さを知ってもらいたいと思いきいオープンしたと回顧する。

「また、その時代の食の変化・特に食のスタイルにお客様は敏感で、すぐに数字（売り上げ）にあらわれます。そういうことは、地酒の販売ではわかり難い部分で、それだけに気がぬけないところ、地酒造りにもその感覚は生かされています。」と今西社長。

時代は、変わっても造り酒屋の使命は、良いお酒（各人の好みに合ったお酒）を楽しくおいしく飲んでいただく。その願いは変わらない。
昨今、お酒はビール、焼酎に押され、低迷ぎみと言われているが、本来の日本酒は日本古来



の伝統と匠の技と杜氏のたゆまぬ努力と研鑽があり他に類をみないほどの永い歴史が積み重ねられた中にある。

今西酒造様は、地元のお酒をもっと知ってもらいたい、また、地域への貢献・奉仕そんな思いと志をもって歩み、研鑽を続ける日々である。

ダイニングバー 雷来



今西酒造株式会社

桜井市大字三輪510
TEL.0744-42-6022 FAX.0744-42-3612
imanishi@begin.or.jp http://www.begin.or.jp/~imanishi



ダイニングバー 雷来

奈良市小西1-5 (近鉄奈良駅より徒歩3分)
TEL.0742-27-2710
営業時間：PM5:00～零時 不定休 カード使用可
客席：1F テーブル&VIPルーム
2F 掘りごたつ席&テーブル席
3F パーティスペース&ソファ席
予算：2,500円～3,500円 (ドリンク含む)



高山茶筌

— 竹茗堂 久保左文様 —

奈良県生駒市、「高山」は富雄川沿いに在ります。ここは「茶筌の里 竹細工の里」と呼ばれ、茶道具や竹製品が日々全国へ向けて製造・出荷されています。

茶道具であり、芸術品とも呼べる「茶筌」。そのルーツと工程・種類等を取材すべく、竹茗堂 久保左文様のもとを訪れました。

茶筌の歴史

室町時代、茶道の創始者である称名寺僧侶 村田珠光は、抹茶を攪拌してもてなすことを考案しました。その道具を、連歌仲間である鷹山領主の次男 鷹山民部丞宗砌に依頼し、苦心の末に作り上げられたのが高山茶筌の始まりです。

この茶筌を珠光が当時の帝 後土御門天皇に献上した際、お誉めの言葉と共に「高穂」という御銘を賜りました。これを喜んだ領主鷹山大膳介頼榮は鷹山の地名を「高山」と改め、家臣を使って茶筌作りに励むことになりました。

後に高山頼茂弥治衛門が丹後の宮津へ仕官することになったため、主だった家臣16名に茶筌作りの製作と販売を譲りました。以後、16名家臣たちは「一子相伝」という主の言い伝えを固く守り、高度な技の維持と流

出を防ぎつつ連続と500年間、高山の地で茶筌を守ってきたのです。

やがて技術の公開から職人が独立、昭和40年代には業者は50軒を越えるまでになりました。現在は茶道人口の減少もあって、約30軒に減少しましたが、国内産の90%以上、年間60〜70万本が高山にて生産されています。



茶筌の種類

茶筌は用途や流派によって、竹の種類や穂の形、穂数、竹の太さ、竹の長さ、糸の色等が下記のように区別されます。一本の竹の先を細かく割り、形を整えてゆくののです。

用途別 薄茶用・濃茶用・献茶用・筒茶碗用・茶箱用・野点用・初釜用・祝茶筌

流派別 御銘高穂・表千家流・裏千家流・武者小路流(官休庵)・有楽流・三斎流・宗和流・石州流・遠州流・藪内流・庸軒流・宗偏流・久田流・不味流(雲州流)・堀内流・松尾流・町田流・周防流・志野流



御銘高穂



表千家真数穂



裏千家真数穂



官休庵



有楽流(節止)



節止赤糸

茶釜造り工程

1. 原竹 (げんちく)



白竹：硬く粘りのある淡竹(はちく)の二、三年生が良材である。十一月～二月にかけて切り出された竹を湯で煮沸し、油や垢を拭き、寒の太陽に一ヶ月晒す。白くなると、取り入れ倉庫に蔵(ほ)う。

黒竹(紫竹)

煤竹(すすだけ)(天然)：日本の人家に使われていた白竹で釜戸、囲炉裏の煙で燻されて、こげ茶色に成った竹。最近白竹を薬品等で染め、煤竹といっている粉い物の煤竹茶釜が多数出回っているが、当店では天然煤竹のみを使用しております。

2. 片木 (へぎ)



節上半分位から、先の方の表皮をむく。次に大割包丁で半分半分に割っていくと十六になる。これを、一片腕コジ上げ包丁で皮肌と肉を分け、肉を除く

3. 小割 (こわり)



十六割の一片を、大小交互に割っていく。八十本立の場合は、一片を十平均に割ると、百六十本になり、太い穂が八十本になる。

4. 味削 (あじけずり)



小割を逆にし、穂先の部分を湯で煮て台の上に乗せて、肉の方の根元から先になるほど薄くなる様に削る。適当な薄さに削れると、内側に丸くなるようにしごき形をつける。茶釜の形によって削り方を変える。

茶の味はこの味削りに依って変わると言われる一番難しい工程である。

5. 面取 (めんとり)



削り上がった茶釜の太い穂を、一本ずつ穂の両角を薄く削って角を除く。これはお点前の時、茶が附着しないようにする為である。

6. 下編 (したあみ)



面取りの出来た太い穂を上げ、糸で編んでいくと、細い穂はそのままで太い穂は開く。

7. 上編 (うわあみ)



下編の出来た開いた穂を糸掛け、二回廻り根元をしっかりする様にす。

8. 腰並 (こしならべ)



内穂を竹筥(へら)で内側に寄せ、穂を組み合わせ茶釜の大きさを決め、根元の高さと間隔をそろえる。

9. 仕立



穂先を曲げ直したり、それぞれの形に整え、根元から穂先までの高さ、間隔等一切を直し、箱に糊(のり)付けする。



村田珠光によって茶道は考案され、その所作・空間は千利休によって確立されました。そして今日、日本人のみならず諸外国の方々へも、「茶」は浸透しつつあります。

繊細な技術と、そこに込められた「おもてなしの心」。茶釜は、私たちの心の根にある溜まりさえも、するりと攪拌してくれるようです。

茶釜はおおよそ10cm程度のサイズのものが多いですが、ご依頼によっては、約30cmを超える茶釜も作成されます。サイズが大きくなるほど、それに適した節の間の長い竹は見つけにくいものです。お水取り用として採られた竹を頂戴されることもあるとのこと。もちろん、減多に手に入らない竹を扱うことになり、増しての集中力が必要です。1mを超すような大きなものを加工する際は、奥様がその竹を背中で支えつつ、ご夫婦二人阿吽の呼吸で茶釜作りにつとめることもあるそうです。

初釜用に使われる「青竹茶釜」。青竹とは、竹林にて伐採したばかりの新鮮な竹のことです。初釜数日前とれたての青竹を、そのまますぐに茶釜に加工します。その茶釜でお茶を点てると、青竹の香りと甘みで、なんとも美味しい茶が点てられるそうです。青竹茶釜には、そういった「おもてなしの心」が込められています。

お問い合わせ

竹茗堂 久保左文

奈良県生駒市高山町 6439-3

TEL 0743-78-0034

<http://www.chikumeido.com/>

命
が吹き込まれる

KYODO SEIHAN PRINTING
KSP

紙
が
でき



R100

●本誌は100%古紙配合の再生紙を使用しています。